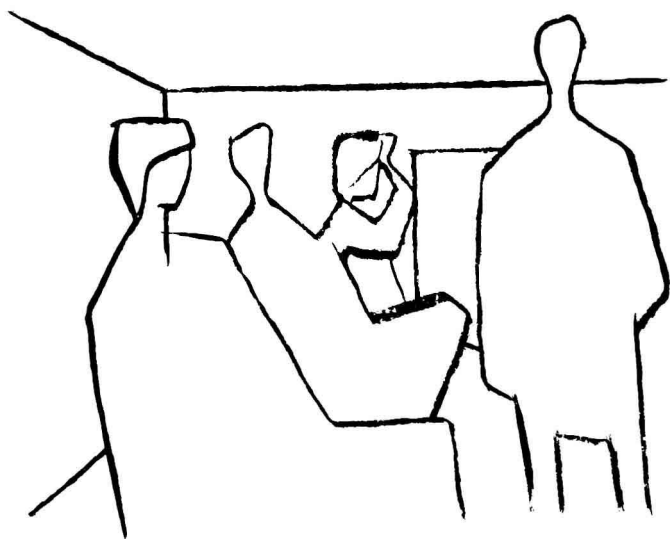


天上大風

源氏鶏太自選作品集 第四卷



講談社

源氏鶏太自選作品集 4 天上大風

昭和四十八年十二月二十日 第一刷

著者 源氏鶏太

装幀者 大沢昌助

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二丁十二番一 郵便番号一〇二
電話東京九四五一一 一〇二 大代表 振替東京三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社国宝社

定価 一二〇〇円

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

© 源氏鶏太 一九七三年

目次

天上大風

三

英語屋さん

三七五

御先代様

三九五

天
上
大
風

娘と青年

昨夜の雷雨で、どうやら、梅雨は、すっかり、上がったらしい。午前の太陽が、雲ひとつない、気の遠くなるような空に、ガラガラと、照りつけていた。

有楽町駅で下車した一人の娘が、その太陽を、まぶしうに見上げてから、歩きはじめた。日劇の前を通るとき、チラッと看板の方を見たが、たいして興味もなさそうに、さっさと、数寄屋橋の方へ歩いていった。

ちゃんと、胸を張っているのだが、しかし、よく見ると、そこに多少の「幼い虚勢」じみたものが感じられぬこともなかった。

二十一か二か……。

しかし、これもそばへ寄っていった、よく見れば、まだ、十八か九、というところだろう。眼尻が、すこし吊り上がっていて、負けず嫌いを想わせるが、しかし、その瞳は、張りのある美しさをたたえていた。

五尺二寸ぐらいの中肉、むき出した腕は、小麦色に焼けているが、色は白い方だった。その胸の隆起だけを見て

も、この娘の肉体は、すっかり、一人前に成熟していることがわかる。

誰もが、ハツとして、振り返って見るほどのことはないとしても、先ずは十人並、そして、つき合っている、すぐに飽きのくる顔立ちではないようだ。

数寄屋橋を渡りきった娘は、ちょうど、青の信号の出た横断歩道を、人波にもまれながら、向こう側に渡りついて、更に、そのまま、新橋駅の方へ、歩いていった。

その通りには、幾つものビルディングが立っていた。娘は、そのビルディングの一つ一つの前で、歩みをとめた。そして、いくつ目かの大きなビルディングの前に立ったとき、

「日吉ビルディング……。ああ、ここだわ。」と、軽く、叫ぶようにいった。

娘は、いったん、舗道の端まで下がって、そのビルディングを見上げるようにした。一階、二階、三階……、七階建であった。瞳を細くして見上げる娘の額には、汗がにじみ出ていた。

娘は、顔をもとの位置に戻した。一瞬、ためらいの表情を浮かべたが、それを、例の「幼い虚勢」で押し切ると、つかつかと、ビルディングの中に入ってしまった。

正面に、三台のエレベエタアが動いていた。その真ん中のエレベエタアが、ちょうど、降りてきて、客を吐き出しているところだった。

娘は、そのエレベエタアに乗り込んだ。

「日吉不動産は、何階でしようか。」

「七階です。」

数人の客を乗せて、エレベエタアは、上昇を開始した。

娘は、エレベエタア・ガールの仕事振りを、熱心に見つめていた。エレベエタアは、途中で何度も停った。

「七階です。」

「すみません。」

娘は、丁寧に頭を下げて、外へ出た。そのとき、エレベエタアに残っていたのは、娘と、もう一人、二十五、六歳の青年と、二人だけだった。

どっちへ行っているのか、と迷っている娘に、その青年は、

「日吉不動産は、こっちだよ。」と、振り返るようにいった。

恐らく、その青年は、娘が、さっき、エレベエタア・ガールに質問したのを、聞いていたのだらう。娘も、その青年が、ずっと、自分の横にいたような気がした。

ひっそりした廊下を、娘は青年のあとからついて行った。

「ここだよ。」と、青年が、振り返って、いった。

目の前の硝子扉に、金文字で「日吉不動産株式会社」と書いてあった。そして、青年は、さきと、その扉を押して開いて、中へ入っていった。

（何アんだ、この会社の人だったのか）

娘は、何か、幸先のいいような気がして、微笑した。微笑すると、エクボの出る顔である。

娘も、その扉を押して開いて、中へ入った。廊下の静けさとは、別世界のように、たくさんの人々が、広い事務室の中で、いそがしそうに、働いていた。

娘は、今の青年が、どこにいるのか、探すような眠つきをしたのだが、みんな、似たような人ばかりで、わからなかった。すぐ目の前に、カウンターがあって「受付」の木の札が、立っていた。

「あのう……。」

雑誌を読んでいた給仕が、顔をあげた。

「社長さん、いらっしやいましょうか。」

「まだです。」

娘は、壁の電気時計の方を見た。すでに、十時三十五分である。

「何時頃に、お見えになるのでしょうか。」

「さア……、わかりません。」

「でも、今日は、お見えになるのでしょうか？」

「さア……、わかりません。」

「まア。」

娘は、困ったような顔になった。

「どういうご用でしょうか。」

「ちょっと……。」

そういつてから、娘は、

「社長さんに、お目にかかりたいのです。」

「ですから、そのご用件をお聞きしているんです。」

「それは、社長さんに、直接、お目にかかってからでない」と。

給仕は、はじめて、ウサンくさげに、娘の方を見た。娘の方でも、そんな風に見られても仕方がない、と観念したらしかった。弱弱しい顔になりかかったのだが、すぐそんな弱気を、振り切るようにして、

「じゃア、ここで、お待ちいたしますわ。いいでしょう。」
「どうぞ。」

娘は、その長椅子に、腰を下ろした。給仕は、ふたたび、雑誌を読みはじめた。

十分、二十分……。

娘は、しだいに、落ちつかない気分になって来た。

（――招かれざる客）

そんな言葉が、頭に、チラチラしはじめてくるのである。

「君、どうしたんだい？」

顔を上げると、さっき、廊下で案内してくれた青年が、カウンターの向こうから、覗き込むようにして、こっちを見ていた。

娘は、ホッと、救われたように微笑んで、

「社長さんを、お待ちしているんです。」

「社長を？」

青年は、ちょっと、意外だったらしい顔をしたが、

「すでに、十一時だな。この分では、今日も休みかも知れないよ。」

「そんなに、ちょいちょい、お休みになる社長さんですの？」

「そうなんだ。」

「社長さんのくせに――。」

娘は、思わず、そんな風にいつてしまった。

青年にとって、娘の言葉は、意外だったらしい。

（ほう）

と、いうように、あらためて、娘の顔を見直した。

（悪くないな）

青年が、いった。

「そうなんだ。まったく、君のいう通り、社長さんのくせに、だよ。しかし、心配はご無用に願いたいな。何故なら、わが社には、人材が雲の如くに集まっているんだ。たとえ、社長が、しょっちゅう、欠勤したとしても、会社は、ビクともしないからね。」

「あら、そんな意味で、いったんではありません。」

「まあ、どういう意味でいったのかしらんが、あとは、社長に、直接、いつてくれたまえ。そうしたら、社長も、すこしは改心するかも知れないよ。」

そういつて、青年は、カウンターの前をはなれていった。そして、自分の席に腰かけると、娘の方を向いて、ニヤリと笑ってみせたのである。

向かい合った机が幾つも、縦に並んでいた。青年の席は、そのいちばん右側の、しかも、末席の方であった。恐らく、入社してから、そんなに年月が経っていないので、下ッ端なのであろう。

（もし、この会社に入れたら、あの青年と親しくなってもいいわ）

娘は、そんな風に思ったのだが、しかし、問題の社長が、出社してこないからには、どうにもならないのである。愚図愚図していたら、じきに、お昼になってしまう。

娘は、ジリジリしていた。

カウンターの上の扇風機は、娘の方を向いて、ゆっくり、頭を振っていた。なま温かい風が、定期的に、娘の顔に吹き寄せられてくる。

思えば、けさから、ずっと、緊張していた。そのあぐくの睡魔が、彼女を襲って来たようであった。娘は、自分の膝を、つねって、その睡魔とたたかわねばならなかった。

青年が、ふと、顔を上げて、カウンターの方を見ると、娘は、コックリ、コックリ、と居眠りをしていた。しかし、それは決して、醜い寝顔でなく、むしろ、可愛げのある、清純な印象であった。青年は、微笑を浮かべて、それを見ていた。

すると、彼の周囲でも、娘に気づいて、クスクスと、笑う者が出て来た。

「いったい、何者だろうか。」

「社長に会いたい、といってるんだが。」

「じゃア、社長の内証のバーの借金取りかな。」

「まさか。あれは、絶対に、そんな女じゃアないな。」

最後に、青年が、断固として、否定した。

「君、君……。」と、肩を叩かれて、娘は、ハッと、眼を醒ました。

さっきの青年が、目の前に、立っていた。

「あら。」

娘は、顔をあからめて、

「あたし、嫌だわ。こんなところで、居眠りなんかして。」

「そうだよ。」

「ねえ、社長さん、まだですの？」

「まだだ。今、秘書に聞いて来たら、午後から出るそう
だ。」

「まア、午後から？」

「そうなんだ。ところで、ちょうど、十二時だが、君、お昼ごはんをどうする？」

「どうするって？」と、娘は、聞き返した。

「よかったら、僕といっしょに、外へ食べにいかないか、という意味だよ。」

「でも、その間に、社長さん、出てこれないかしら？」

「大丈夫だ。午後二時だそう。」

「どうして、あたしに、ご飯を誘ってくださるの？」

「君の腹が、減ってるだろうと、思うからさ。」

「そりゃア、ベコベコよ。だけど……。」と、娘は、青年の顔を見上げて、「あたし、思った通りにいうわ。そんなの、まるで、不良青年みたいじゃアない？」

「ご冗談でしょう。不良青年になる程の甲斐性をほしい、と思ってるくらいだよ。」

「じゃア、連れて行って頂くわ。」

「勿論、割カンだよ。」

「いいわ、でも、百円以内でなくっちゃア、あたし、おこ
とわりよ。」

「いいとも、五十円のライスカレー、どうだい。」

「結構だわ。」

二人は、連れだって、外へ出た。

外は、さっきより、いちだんと、暑くなっているようだった。

青年の連れていくてくれた五十円のライスカレー屋は、近くのサラリーマンで、満員であった。そのため、二人は、席の空くまで、三分ほど、待たねばならなかった。

その間に、娘が、いった。

「ねえ、日吉不動産で、いい会社なんでしょう？」

「さあ、あんまり、よくないさ。月給だって、安いしな。」

「あなたの月給、いくら？」

「そんなことを聞いて、どうするんだ。」

「あたしも入りたいのよ。」

「君が？」

「そうよ。」

「おかしいな。今、欠員はないはずだが。」

「でも、社長さんは、エレベエター・ガールに一人、欠員があるってことだったわ。」

「それも、すんだはずだ。きっと、社長は、知らないんだ。」

「まア、社長さんのくせに。」と、また、娘が、いった。

「そう、社長さんのくせに、だよ。だって、ウチの社長は、あんまり、実権がないんだ。」

「それじゃア、あたし、困るわ。」

娘は、いかにも、ガツカリしたようだった。

「君は、どうして、社長を知ってるんだい？」

「あたしじゃアなく、お姉さんが、知ってるのよ。」

「お姉さんが、どうして、社長を知ってるんだ。」

しかし、そういつている間も、青年は、絶えず、席の空くの注意到いたらしく、

「あッ、あそこが、空いたよ。」と、素速く、動いていつて、二人分の席を取った。

青年と娘は、向かい合つて、腰をかけた。周囲で、勝手勝手に喋っているの、喧騒を極めている。しかし、そのため、こつちの話も、誰にも聞かれる心配はなかった。

「あたしのお姉さん、銀座のバーに、働いているのよ。」

何アんだ、というように、青年は、娘を見た。

「昨日も、社長さん、そのバーに、いらっしたんですつて。」

「そのためだな、今日、社長が遅いのは。」

「どうして？」

「だって、秘書が、いつていたよ。また、宿酔^{あかま}いらしい、つて。」

「社長さん、そんなに、お酒が好きなの？」

「好きらしい。しかし、本人は、会社が面白くないから、酒を飲んでいるつもりらしい。」

「どうして、面白くないの？」

「さっきもいったように、社長のくせに、実権がないからさ。」

「どうして、実権がないの？」

「若いんだ。やっと、三十一歳なんだ。要するに、金持ちのお坊っちゃん育ちで、その上、気が弱い、と来ている。

気の弱い社長なんて、凡そ、意味がないんだよ。しかし、君は、こんなことを、僕がいつたと、喋ってはならんぞ。」

「いわないわ。それに、あたしは、そんなお喋りじゃアなくつてよ。第一、あなたの名前も、まだ、聞いてないんだもの。」

「僕は、総務課の大間修治だ。」

「あたし、白石厚子よ。」

そこへ、ライスカレーが、運ばれてきた。大間は、早速、一口たべて、

「どうだ、割合に、うまいだろう？」

「ええ、五十円にはしては。ねえ、今の話の続きを、もっと、して頂戴。」

「今の話？」

「気の弱い社長さんの話よ。だって、あたし、これからお会いするんですもの、重大な関心を寄せるわ。」

「社長は、目下、独身なんだ。」

「まア、素敵ね。」

「よせやい。とにかく、僕の会社は、外から見ると、至極、円満にいつているようだが、中へ入ると、複雑怪奇なんだ。重役たちが、派閥争いをやっているんだからたまらんですよ。」

「だって、重役さん同士の争いなら、下の方に、関係はないでしょう？」

「それが、大ありだから、困るんだよ。仕事さえ、一所懸命にやっていたらいい、というのとは違うんだ。」

大間は、若い顔を、憂鬱そうに、しかめさせた。

「要するに、今の社長が、もっと、しっかりするか、でなかったら、実力第一の人物が、社長になってくれたらいいんだ。僕なんか、社長なんてワンマンであってほしい、と思っている。」

「あたし、なんだか、心細くなって来たわ。でも、そんな会社でも、やっぱり、入社したいわ。ええ、絶対に。」

「いったい、君のお姉さんと社長とは、どういう関係なんだい？」

「どういう関係って、ただのお客さまよ。」

「ただのお客さまなのに、社長が、妹の君を採用してやるといったのかい？」

大間は、ちょっと、不愉快そうにいった。

「ええ、そうよ。お姉さんが、ゆうべ、頼んでみたんですって。そうしたら、エレベエター・ガールでよかったら、とおっしゃったのよ。」

「しかし、僕たちにとっては、嫌だなア。社長ともあろうものが、酔っぱらって、そんな約束をしてくるなんて、なっとらん。」

「まア、ひどい。」

「だって、そうじゃアないか。」

大間は、上半身を、ぐっと、乗り出すようにしていった。

「何が、そうなのよ。」

厚子は、やり返した。

大間は、氷の入ったコップの水を、一口、ゴクンと飲んで、

「君のしようとしていることは、要するに、裏口入社ではないか。」

「そうよ。」

「僕は、そんなの、人間として、卑怯だ、と思うんだよ。」

何故、堂堂と、正門から入社試験を受けて、就職しようとしななんだ。いいかね、世間には、立派な才能がありながら、裏口入社の中の犠牲になっている——。」

「ちょっと、待って。あたし、学校にいる時から、何度も、あなたのいう正門からの入社試験を受けたわよ。」

「すると、みんな、ダメだったのか。」

「そうよ。でも、あたしは、あなたから、そんな軽蔑くさい顔で見られるの、心外だわ。」

「しかし——。」

「まア、聞いて頂戴。あたし、どこの会社へ行っても、学
科試験には、たいてい、満点を取ったわ。」

「ほんとうかね。」

大間は、疑わしそうな顔をした。

しかし、こんどは、厚子の方が、身を乗り出すようにし
て、

「いつも、問題は、面接の時にあったのよ。重役さん、き
つと、聞くわ、

——君、ご両親は？」

——はい、戦災で、二人とも、亡くなりました。

——そいつは、お気の毒だね。すると、今は？」

——姉とふたりでいます。

——じゃア、君の学費その他は、そのお姉さんが出して
いるんだね。

——はい。

——いいお姉さんだな。それで、お姉さんは、どっかに
お勤め？」

——はい。

——どこに？」

——銀座のバーで、働いています。

——ほう……。

それで終りよ。中には、お姉さんに、どうか、よろし
く、はッはッは、という人だつてあったわ。ねえ、あたし
が、いつも、落第してきた理由、わかつたでしょう？」

「うん。大きな社会問題に関連しているよ。」

「だから、お姉さんは、お店へくる重役さんたちに、あた

しのことを、一所懸命に頼んでくれるのよ。だって、こう
なったら、裏門も表門も、いつてられないわよ。」

「そうだな。」

「本当をいうと、あたし、今までに、二度、お姉さんの口
添えて、よその会社へ行つて来ているのよ。」

「そうしたら？」

「一度は、酒の上の冗談を、本気にして、こんなところま
で、ノコノコと出てこられては困る、と苦い顔をされた
わ。」

「ひどいもんだな。」

「もう一つの方は、そんな会社、なかったわ。ユウレイ重
役だったのよ。」

「よし、わかつたよ。こうなったら、僕は、君が、わが社
に、めでたく入社出来ることを祈つてやるよ。」

「ありがとう。」

「しかし、その前に、五十円を出したまえ。ここのライス
カレー代だ。」

大間は、厚子の前へ、手を出した。

その大間の手を、しばらく、眺めていてから、厚子は、
ゆっくりと、ハンドバッグを開きかけた。けさ、出がけ
に、姉から二百円貰つて来たのだが、その中から、電車賃
を払つただけである。

さア、早く、というように、眼の前の手が、ヒラヒラし
ていた。

厚子は、十円玉を五個、その手の上に、のせてやろうと
したとき、うしろから、

「ストップ。」と、声がかかった。

おどろいて、厚子が振り向くと、女の笑顔があった。三十前後であらうか。

「何アんだ、正木さん、そんなところにいたのか。」と、大間が、ちょっと、てれながらいった。

「いたわよ。だけど、大間さんて、案外、ケチなのね。」

「ケチ？ 冗談じゃアない。僕は、ケチなんて、大嫌いな男なんだぜ。」

「じゃア、女のひとを連れてきて、どうして、五十円のライスカレー代を取ったりするのよ。」

「だって、それは、はじめからの約束なんだ。」

「そこが、そもそも、ケチである証拠なのよ。」

「絶対に違うね。僕は、今日、はじめて、このひとに会ったんだ。」

「それも、ここで、聞いていたわ。大間さんも、なかなか、筋の通った立派な口を利く、と思っていたのよ。あれでも、流石は男の子だ、と感心しているところへ、五十円を出せ、ときたので、すっかり、幻滅を感じてしまったわよ。」

大間は、苦笑した。すると、女も笑った。

「要するにだね、正木さん。僕は、このひとにおごつてもいい、と思つたんだ。」

「じゃア、おごつてあげなさい。」

「しかし、はじめて会って、そんなことをすると、いかにも、僕が、女に甘い男のように思われそうな気がしたんだ。」

「女に甘い男は、大歓迎よ。ケチな男より、余ッ程、立派だわ。大間さんも、せいぜい、女に甘い男になるように修

業しなさい。それくらい度胸がなかったら、一人前の男になれないわよ。」

そういって、その女は、席を立てていつてしまった。

「どなたなの？」と、厚子が、いった。

「会社随一のオールドミス、正木信子という女なんだ。」

「でも、ちつとも、オールドミスらしくないひとだったわ。」

「そうなんだ。そして、もし、君が、わが社に入社したら、あのひとの子分にならなければならんだ。」

「あたし、なつてもいいわ。」

「ただし、正木さんは、あれで、社長派だ。」

「まア、社員の中にも、いろいろの派があるの？」

「あるとも。ほかに、専務派、常務派、いろいろあるのだが、目下の処、社長派の勢力は、いちばん、弱いようだな。」

「じゃア、大間さんは、何派？」

「僕は、中立さ。しかし、いろいろ、悪口をいうが、社長の立場には、同情しているね。」

「じゃア、あたし、社長派になるわ。だって、もし入社出来たら、それは、社長さんのお陰なんですよ。」

そういって、厚子は、せっかく出した五十円を、大間の目の前で、ハンドバッグの中に戻してしまった。

ロ
ボ
ッ
ト

日吉善太郎は、眼を醒ました。まぎれもなく、自分の家のベッドの上である。しかし、昨夜は、どうして、家へ帰ったか、よく覚えていなかった。

頭が、モウロウとしていて、吐気を感じる。明らかに、宿酔いの症状だった。

（また、飲み過ぎた……）

煙草に火を点けたが、すこしも、うまくなかった。立ちのぼる煙を見つめながら、近頃、酔えば、正体もなくなる自分を、

（意気地なし……）

と、責めていた。

酔うのは、いくら、酔ってもかまわぬ、と思っていた。正体がなくなってもいいのである。ただし、辭憤を晴らすために、そうなっている自分なのだ、と知っているだけに、嫌だった。

（名目だけの社長……）

それが、やり切れなかった。若い自尊心を傷つけられていた。

煙の間から専務の田所榮之助の顔が、浮かんで来た。

その田所が、昨日、いったのである。

「社長、いよいよ、地下室を東亜興業に、貸すことにきま

りました。」

「東亜興業？」

善太郎には、初耳であった。

「そうですよ。」

五十五歳の田所から見れば、善太郎など、子供と同じであつた。

しかし、彼は、あくまで、インギンなのである。決して、二代目、金持ちのお坊っちゃん、という顔では、見なかった。

「このビルの地下室を、キャバレーにするんだそうです。」

「冗談じゃアないよ。」

「えッ、どうしてですか。」

「だって、この日吉ビルには、カタギの会社ばかり入っているんだよ。それを、地下室にキャバレーなんかはじめられたんでは、早速、苦情が出るよ。」

「キャバレーだって、夜だけのことですし、入口も、別につけるんです。勿論、その工事は、東亜興業で持つんですからね。」

「いや、困るよ。」

「困るって、今更、社長、もう追っつきませんよ。」

「第一、僕は、何も聞いていないよ。」

「おや、そうでしたかな。」と、田所は、空とぼけてみせて、「たしか、お話ししたと思ったんですがねえ。どうも、失礼しました。」

「……………」

「そのかわり、坪あたり、七万円を出させます。したがって、千五百万円ぐらいが、ただで、ころげこんでくる勘定

になります。時節柄、悪くない、と思うんですよ。」

「……………」

「それに、この契約を破棄したら、相手が相手ですし、どんな難題を吹っかけてくるかわかりませんよ。まア、千五百万円を思つて、ご承諾下さい。」

そういつて、田所は、また、インギンに頭を下げて、社長室から出ていった。

なるほど、会社へは、千五百万円の金は、入るだろう。

しかし、田所のふところへ、いったい、いくら入っているのだと、善太郎は、思うのであった。が、彼には、それを調べる術がなかった。みすみす、不正を見逃しているような割り切れぬ気がしてならなかった。

近頃、善太郎は、心の底から、田所を憎んでいる、といつてもよかつた。

そのくせ、彼の前へ出ると、身は社長でありながら、どうしても、強いことがいえないのである。性格のせいもあるうが、やはり、役者が違う、といった方があつていゝかも知れない。

一方、善太郎は、田所の実力を、認めないわけにはいかなかった。

彼さえいてくれたら、日吉不動産は、ピクともしないだろう。善太郎は、毎日、遊んでいても、会社の業績には、差し支えがなかった。そのかわり、彼の横暴、そして、多分、犯しているであろう不正行為を、見逃さねばならぬのである。

社内には、田所の子分といつていい社員が、たくさんいるはずだ。しかし、善太郎には、腹心の部下は、ひとりも

いないのである。

(要するに、僕は、社長だが、会社では、孤児なのだ)

ロボットとわかつていれば、毎日、出勤する張り合いもないのである。しかも、人は、結構なご身分だ、という。

コツ、コツ、コツ……。

ノックの音が、聞えている。

「誰？」

「あ、た、く、し。」

扉が開かれて、妹の高子が、顔を覗かせた。

「まア、生きてらしたのね。」

「あたりまえさ。」

「あたりまえもないわよ。今、何時だ、と思つてらっしゃるの？」

「知らんよ。」

善太郎は面倒くさげにいった。

「もう、十一時に近いわ。ゆうべは、随分、酔つてらしたわね。」

「ふん、そうかね。」

高子は、兄の枕許の煙草を取ると、火を点けた。

「おや、お前、煙草をのむのか。」

「そうよ。女も、二十七歳になると、煙草ぐらいのむようになるわ。」

しかし、その煙草を持つ手つきは、いかにも、不器用であつた。

(そうか、もう、二十七歳になつてゐるのか)

あらためて、善太郎は、妹の顔を見直した。性格と同じ